

まちづくり②

高齢者の暮らしを支える 主婦ヘルパー

静岡・沼津市 さわやか沼津





ひとり暮らしの川口あや子さん(76)のお宅に新井君子さんがやって来るのが午前十時。殿岡礼子さんと二人体制の給食サービス。まとめて二日分の食事を作り保存しておく。お米を固く炊いたり味噌汁がしょっぱい、少量作るのが苦手という若いヘルパーさんがいるようだが、そこは主婦の得意分野とばかりに手際よく食事を作っていく。その合間にも様々な会話が交わされる。



背が丸くなった川口さんは水道の蛇口がひねれない、電気のスイッチが入れないなど、日常のちょっとしたこともままならない。しかし、川口さんを支える多くの人のお陰で、ひとり暮らしを続ける。 「トイレに一人で行けなくなるまでは自分の家で暮らしたい」と川口さん。

「障害者の意見を取り入れられないで障害者のトイレを作るから使えないものが出て来ってしまう。そういうことを一つ一つ市役所に説明しに行く」と庄司孝夫さん(71)。週に一回入浴サービスにやって来る水内喜恵さんは庄司さんのことを「障害のプロ」と呼び、こう続ける。「黙っていないで市に要望するところが偉いと思う。だって自分が困っていれば他にも困っている人がいるはずだから」

庄司さんと水内さんの介護のつながりはもう七年になる。「最初は女性に裸を見





られるのは本当に恥ずかしかったよ」と庄司さんが言えば、水内さんもすかさず「私だってこうだったわヨ」と笑いながら両手で目を覆う。介護保険より多少割高になる同会のサービスだが、「金は何とかなっても、ヘルパーさんとのこういうつき合いがどれほど大切かとおつくづく思うよ」と庄司さんは言った。

平成六年に高齢者福祉に関する勉強会としてさわやか沼津（代表・城井不二子さん）の母体がスタートした。ところが一年間の勉強期間を経るとメンバーの中から「勉強ばかりじゃしょうがないよ」という声がたくさん聞こえてきた。城井さんはメンバーに問いかけた。「リスクも大きいけど、それでもやりますか？」メンバーの熱意はリスクを上回り、高齢者の暮らしを支える主婦たちの団体として本格的な取り組みが始まった。

利用者は一時間千円分で利用券を購入し、月末に利用した金額分の利用券をヘルパーさんに手渡す。利用者の多くは週一〜三回程度同会のサービスを利用し、介護保険と併用している。昨年度は利用者は三十九人、利用時間は約三千時間だった。

介護保険がスタートした平成十二年にはメンバーも「これで少しは安心だ」と思ったそうだ。「メンバーには『過度なサービスはいけない』と言ってはいますが、ある程度は許容しないと高齢者の面倒は見ていけないです」と城井さん。確かに介護保険を利用して頼んだヘルパーは、望むと望まざるとにかかわらず時間に縛られる。そういう公的な制度

では手の届かないサービスを担う同会のような存在は、高齢者にとって必要な存在になっていくといっても過言ではない。介護保険がスタートしたとき「これまで受けてきたさわやかさんのサービスをやめたくない」という利用者がたくさんいたという事実がそれを雄弁に物語っているだろう。この点について城井さんは「仕事というよりも精神的な支えとなっている部分がすごく大きいと思う」と話す。結局同会の仕事量は介護保険スタートの前と後では変わりがなかった。「介護保険と私たちのサービスを併用していかないと思わ

現状ですよ」と副代表の高橋美美子さんは窮状を訴える。

メンバーの深澤繁子さんはヘルパーについて、「亡くなった姉にしてあげられなかった想いを込めてお世話をしています」と言う。このように自分の力を誰かのために役立てたいとの気持ちで、事務的な仕事にならない同会の特徴なのかもしれない。

同会を立ち上げる際に相談した堀田力・さわやか福祉財団理事長は城井さんたちにこう言ったそうだ。「こういうグループが全国で二〜三千できネットワークが作れたら、身の回りにいる高齢者のお世話をする代わりに、遠くにおいて自分では面倒が看られない身内の世話をしてもらえるサービスの交換システムを作りたい。その先駆けとなって欲しい」と堀田さんはエールを贈ったという。

高橋さんは「今後も介護保険で抜け落ちたサービス・介助を中心に地道に進めていきたい」と話している。

TEL 〇五五 一九二六一三三三六七

